

近世近衛府番長の発展

はじめに

近年、近世の地下役人の研究が進められている。一九八〇年代の朝幕関係研究によって、朝廷内部の立役者、組織化と組織変化などが研究された。そのなか、一条摂関家の諸大夫であった下橋敬長の講演をもとに書かれた書物^①から梅田康夫氏の基礎的な論文^②をへて、地下官人の組織、法的な立場等が研究されてきた。地下官人とは、六位以下の官人および昇殿資格のない四位・五位の官人の朝廷構成員を指す。地下官人の職掌は、諸行事に使われる調度品の管理と調進、または諸行事での脇役と下働きであった。管轄から副職まで様々な局面が証明されてきた^③が、各グループが役によって異なる特徴も持っている、特定の集団に的を絞って細かく調べる必要がある。そのなか、松田敬之氏による近衛府官人の研究^④があり、以下の点がこれまでに判明している。

①古代の近衛府の編成

②近世後期の編成

近衛府は天保五年まで御隨身といった。御隨身は御幸・行啓に供

スウエン・ホルスト

奉し、院御所の四方拝、御即位式、諸節会に勤めた。また親王・摂家・大将等の隨身兵杖の宣下以後もお供をした。行列の際は主君の前後に配置される。東宮が設置される際に帯刀として勤める。節会・御幸啓の時に大臣・大将の供をしたり、衛府長と称して大・中納言、参議の供をしたり、また入道親王が入寺するときに轅の後に付いて行ったりする。

③戸数、家禄、家名取立・相続

戸数は天正年間にはただ四家であったが、その後次第に増加した。松田氏はまとめて五十六家をリストアップしている。その他、『地下家伝』^⑤に載っていない家もあれば、幕末までに絶えた家もあった。

触頭であった調子本家（七十石）と土山本家（百二十五石）だけは近衛府として知行を得た。しかし多くの近衛府官人は口向役人として家禄を得ていた。

多くの近衛府官人が上流公家家（摂関家・大臣家）に所属した。近衛府官人に取り立ててもらうためには、庇護を受けている公家家からの斡旋が必要であったからである。官人仲間内での吟味のう

え、庇護を受けている公家から斡旋してもらい、武家伝奏が動いて、摂政・関白の許可を経て、勅許が下された。

④補任手続

近衛府官人の官位叙任と補職は大将の権限であった(判授官)。左右大将のうち決定権を握っていたのは左大将の方である。

⑤肩入・館入

近衛府の家系には、平公家(堂上家)の家で準家司として勤める家もあった。

⑥着用装束

儀式の際の装束は、近衛府将監・将曹は四等官として束帯姿で、府生と番長が冠・細纓・紺褐衣・二藍袴・白帯・無紋太刀・緒・壺胡六・黒漆弓・中黒矢であった。松田氏は無官位の番長は褐衣を着たことに注目している。他の無官位の地下役人にはその例がないので、番長は位がないにも関わらず近衛府全体(番長を含めて)が官人とみなされていたと結論付けた。

⑦明治維新以降の身分問題

松田氏は、近衛府官人が幕末の混乱期にあまり目立った活躍をしていなかったと述べた後、番長たちがいかにして自分たちを官人として認めさせようと尽力した動きを紹介している。

本論では、松田氏も利用した史料を再確認した後、新たに発見した資料を紹介したい。それを通して近世の地下官人の分析を進めたい。

御隨身から近衛府への形成過程

『地下家伝』は意図的に作られた記録として様々な問題点をかかえている。例えば届け洩れや養子を本当の子に偽る記述などである。しかし近世後期の「地下官人」の理想像としてより細かく調べる価値がある。

まず、各家がいつから近衛府として勤めたかを列挙する。

調子(一)	近世以前二十世代	近世十五世代
調子(二)	天正年間以降	十二世代
調子(三)	慶長一八年から	八世代
富	慶安中絶	明和八年、調子武音二男に再興し、五世代
三上(一)	寛平三年から	近世十二世代
三上(二)	明暦元年から	十世代
三上(三)	宝暦十二年から	五世代
水口(一)	貞観年間から	近世十六世代
水口(二)	寛文十年から	十七世代
水口(三)	寛永二十年から	十一世代
水口(四)	延宝四年から	十世代
水口(五)	宝永二年から	十二世代
水口(六)	明和四年から	六世代
村雲(一)	宝徳二年から	十一世代
村雲(二)	安永七年から	四世代
土山(一)	文明二年から	近世に十一世代

土山(二) 正保二年から十二世代
 土山(三) 天正十四年から十一世代
 土山(四) 土山(三)分家、天明五年から三世代
 村田 元和五年初代から九世代
 鈴木(一) 元和四年初代から九世代
 鈴木(二) 鈴木(一)分家、延宝五年から八世代
 鳥山 元禄元年から十世代
 三沢 宝永四年から十一世代
 渡辺 宝永六年から十世代
 山中 宝永六年から十二世代
 山本 正徳二年から六世代
 岸大路 山本分家、実鈴木(一)の息子、明和六年から五世代
 三宅(一) 宝暦五年から五世代
 三宅(二) 宝暦三年から瀧口、天明元年滝口から御隨身へ、四世代

中世からの伝統を強調する家は調子(一)家である。近世までにすでに二十代が続いているが、その記録は非常に乏しい。以降「何代目」という表現を使うが、これは近世初期の中興の祖から数えたものである。その中興の祖以降にはより多くの詳しい情報が残っている。中興の祖の前に数代存在する先祖もあった。たとえば三上(一)家二五代、水口(一)家五代、村雲(一)家五代などである。土山(一)家の場合、何代目なのかさえも不明であった。『地下家伝』の情報を他の資料と照らし合わせなければならない。

史料一⑥『当今年中行事』

御隨身

従五位下 木坂越中守左近将監藤原元信
 同 土山淡路守左近将監源武徳 家領高百二十二石
 同 水口飛驒^(マ)正^(ウ)左近将監身人部清昌
 同 村田左近将監藤原武済
 正六位上 三上左近将監秦武重
 同 鈴木左近将曹清高
 同 水口右近将曹武知
 同 調子左近将監下毛野武辰
 同 調子左近将曹秦武貞
 同 水口玄蕃権助右近将曹身人部保清
 同 土山右近将曹源武屋
 同 水口左近将曹秦身人部喜氏
 同 川勝右近将曹
 同 加藤伯耆守右近将曹藤原義智
 同 水口左近将生身人部清忠
 同 三上左近将生秦武喜
 同 村雲左近将曹藤原信音
 同 調子右近将曹下毛野武員家領高七十石
 同 水口右近将生身人部友英
 院御所四方拜立明御幸供奉本府之所役御即位中将代少将人位記
 請印之時奉仕之彈官人代等勤之親王撰家大将等隨身兵杖之宣下
 己後供奉院御幸供奉春宮之時帶刀之

この史料によると、木坂家、川勝家、加藤家が御隨身であったが、『地下家伝』には載っていないのが明らかである。

『京羽二重』は十七世紀末からおよそ二十年ごとに一二〇年に亘って出版された書物である。そのなかに地下官人と役人のことも記載されている。『京羽二重』または『京羽二重大全』は朝廷関連の専門書物ではないため誤りがあるかもしれないが、当時よく出回っていた書物であるので関係者も目を通したであろうと想像できる。『地下家伝』のように家の伝統等を強調することなく、素直に現状を映しているため史料価値がある。

約六十年の間に大幅な人数の増加が目立つ。貞享二年（一六八五）^⑦には十七人であった御隨身官人は、宝永二年（一七〇五）に十八人^⑧となった。しかし、宝永元年（一七〇四）^⑨には史料一のとおり十九人であった。ここには『地下家伝』に記入されていない木坂家、川勝家、加藤家がみられるが、いずれも約二十年前には記入されていなかったものである。特に木坂元信は、宝永元年（一七〇四）に位階の観点から見ると筆頭であった。昇進の痕跡がないのが奇異な感じを抱かせる^⑩。そのほか、宝永元年（一七〇四）には鈴木家が初めて登場する。『地下家伝』によると鈴木家の初代は元和年間に活躍したそうであるが、二代目が登場するのは五十年後である。二代目鈴木長矩の名は貞享元年（一六八四）十二月に補任しているのので、『京羽二重』の情報が最新ではなかったと説明できる。しかし宝永元（一七〇四）年に載っている鈴木清高の名は誤記であり、実は水口（五）家の二代目清高であったと想像できる。鈴木長矩が見当たらない。貞享二年（一六八五）の記録では土山家と調子

家が筆頭になっている。

延享二（一七四五）年^⑪には三十一人になった。この時点から渡辺家の名が『京羽二重大全』のなかで見られる。これは『地下家伝』と一致する。鈴木家に関する記述も『地下家伝』と一致している。

明和五年（一七六八）に御隨身は三十八人に増えた。明和五年（一七六八）の『京羽二重大全』から御隨身官人が位階によって並ぶようになったため、情報の正確さが増しているであろう。天明四年（一七八四）^⑫に四十二人となった。文化八年（一八一）には五十六人にまで膨らんだ。この成長を見ると、人数を捌くために組織化を図って朝廷が番長というポストを再興したのではないかと想像できる。

延享二（一七四五）年の三十一人に對し、文化八（一八一）年には五十六人がいた。この増加の一因に無位の番長職の設置があり、それにより十三人の番長が登場した。宝永元年（一七〇四）の十九人と比べると、延享二年（一七四五）、文化八年（一八一）には番長以外の官人も増加していることが確認できる。木坂・川勝・加藤の三家が消えて、渡辺家・山中家・鳥山家・山本家が加わった。文化七年（一八一〇）までには四家がさらに加わり、番長にも八人が新たに登場してきた。

水口（一）清定が寛永二十年（一六四三）に番長を補任された。中世を通して番長に勤めた役人が存在したかどうかは別にして、番長は職として存在した。明暦元年（一六五五）に水口清定は將曹に補任、叙位された。それ以降、八代目まで初官は將曹であった。九

代目（宝暦十二年）から初官は府生となった。他の家に目を向けてみると、調子（二）家では貞享四年（一六八七）から府生が初官となっている。調子（三）家は貞享元年（一六八四）、三上家は延宝二（一六七四）年、水口（三）家は延宝四年、村雲家は延宝八年から府生に補任された。これに対して、水口（一）家の四代目はわずかに十二歳で元禄四年（一六九一）に最初に将曹となった。水口（二）家は宝暦九年（一七五九）まで初官将曹であり、宝暦十二年（一七六二）に初官は府生となった。土山（二）家は宝永二（一七〇五）年、三澤家は享保十九年（一七三四）、村田家・鳥山家は享保二十年（一七三五）まで初官将曹であった。土山（一）家は近衛府の触頭として江戸末期まで初官が将曹であることを維持してきた。調子（一）家では天正年間に一回府生に補任され、それから寛永二十年（一六四三）（四代目）そして延宝三（一六七五）年（六代目）から最初の補任は府生となった。六代目から八代目がまず府生に補任された。九代目からまた将曹で初補任された。朝廷から見ると組織化を通じて上下関係をはっきりさせ、官位の価値を高める目的があった。延宝年間からはじまった御随身の格下げは八十年間に亘った。御随身家は様々な方法で対抗したと想像できる。例えば水口（一）家は多くの御随身の家の本家であったことを理由として特別扱いを求めたであろう。知行を貰っている土山（一）家と調子（一）家が上位に立ち、次いで府生家と下位の番長家が並んでいる。これは近世後期の組織である。八〇年間の過程の結果である。しかし近世初期の慶長六年（一六〇一）に調子家が七十石（調子村）、御随身土山家は二十五石であった元和三年（一六一七）、寛永十八年（一六四一）十石

のままで、土山家は知行を百二十五石に拡大された。

近世初期には初官位が高かったが、近世後期になるとほとんど統一された。変更はその家の新しい世代の初補任の際に実施されたので、同時に統一されたわけではなかった。朝廷の方針転換が前に起り、その後段階的に実施されたのである。

位は前の叙位から年数に合わせて与えられたが、上の将監が制限されたので、空きを持たなければならなかった。

史料二^③ 『諸届書并願書類留』享和元年三月

「右将監闕官御座候ニ付小折紙差出度奉存候、右之段御届申

上候、以上

三月 院隨身右近衛将曹源供資

上包 渡辺右近将曹

上包 院御隨身 右近衛将曹源供資

申 右近衛将監

右近衛将曹源供資

家例 左近衛将曹源供園

宝暦十位元年八月二十八日転任左近衛将監

上包 院御隨身 三十三歳

中六年 正六位下右近衛将曹源供資

申 右近衛将監 右近衛将曹源供資

家例 左近衛将曹源供園

宝暦十位元年八月二十八日転任左近衛将監

申 正六位上 正六位下 源供資
勘例 府隨身 紀宗名

天明式年五月八日 叙正六位下 二十五歳

中六年 三十二歳

寛政元年九月十六日 叙正六位上

叙日 源供資

寛政六年閏十一月四日 叙正六位下 二十六歳

至今年中六年」

『地下家伝』に拠れば¹⁵⁾、史料二の将監と正六位下の願いが叶えられた。この時期の将監をみると、右将監は五人、左将監は十人いた。水口(一) 左将監成清は寛政五年、三宅(一) 右将監良意は寛政九年、土山(二) 左将監広綱と水口(六) 左将監快清は寛政十一年(一七九九)に辞官、あるいは亡くなった。調子(三) 武重は寛政五年(一七九三)に左将監に、土山(二) 広巻は寛政五年に左将監に、土山(三) 武城は寛政九年(一七九七)に左将監になり、渡邊供資は享和元年に右将監、三宅(二) 直胖は享和三年(一八〇三)に左将監に転任された。単純な欠官と補充ではないことが明らかである。この問題は、近衛府官人以外の官人が将監に補任されたことよって解決された。

『地下家伝』¹⁶⁾には御隨身に関する規則がいくつか載っている。

①寛延三年(一七五〇) 九月二十四日、左右府生各六人を置くことが定められた。

②五十歳以上でないと六位を超えて、従五位下に叙位されないし、

近衛官とほかの官を兼ねることができない。

③申し込む場合に、中小国の守・介を与える。府生は両大將から補任され、叙位される。

④元文四年六位の叙位の場合、昇進するためには六年間前の位にいないなければならない。五位に昇進するためには十年間勤めなければならない。

明和六年に最後の隨身官人家が取り立てられた。地下官人に対する方針の変更は、明和の口向腐敗事件に関係があったであろう。それで寛政年間に新たな家が隨身に取り立てられた。しかし、朝廷が官位の叙補に慎重になっていたため、初職は無位の番長しか与えられず、四〇年後叙位も条件付きで認められた。

西村慎太郎氏に拠ると、江戸後期により高い位階を得た官人が増加した¹⁶⁾。近衛府に関するこの指摘は江戸中期に当てはまる。延享二年(一七四五)から明和五年(一七六八)の間に従五位の官人は近衛府官人の全体の二〇・五%から二三・八%にふえた。しかし天保十四年(一八三四)に従五位の官人の割合は一四・六%に大幅に下がった。これは無位の番長が増えた効果であるが、無位の官人を除いて、有位の官人だけで考えてもその割合は一九・九%となっており、全体的に位階昇進を抑える方針が見えてくる。

そのほかに官・位・職のアンバランスが目立つ。延享二年(一七四五)に正六位上に鈴木将曹がいるが、正六位下に調子将監もいて、従六位下にも村田将曹がいる。位上の人々が官名を持つのが基準ならば、従六位下の水口も大和守であった。延享年間には様々な官名があったが、文化八年(一八一二)には国の守・介に絞られた。延

享二年（一七四五）より文化八年（一八一二）には御隨身が高い位に登っているが、延享二年に国守は五人がいるのに対して四人しかなかった。文化七年（一八一〇）に位と官の関連が整備された。

貞享二年（一六八五）には将監でも将曹でもない者三名がいた。いわば府生であるが、府生という肩書に馴染みがなかったため、官名の呼び名（主馬、右京、右近）が使われた。その後官位制度の整備の三つの段階が見られる。文化四年（一八〇七）は一つの重要な転換点であった。隨身だけでも、水口（二）家の清隆は和泉守から摂津介に、水口（三）清矩は対馬守から相模介に、渡辺家供資は信濃守から陸奥介に、三宅（一）意愷は安房守から播磨介に、つまり国の守から国の介に格を下げられた。但し、朝廷側の論理としては下国の守から上国・大国の介への転任は格下げではなかった¹⁷⁾。例えば従六位上であった水口清隆にとつては、小国和泉守（従六位下の官）から上国摂津の介（従六位上の官）への転任は現在の位に合わせたことになった。従六位下の水口（三）家の清矩は対馬守（従六位下の官）から相模介（従六位上の官）に転任したが、これは少し位が上回る官であった。三上常斐は正六位上で駿河守から近江介に転任した。駿河（上国）の守は本来従五位の官であり、大国である近江の介は正六位下の官であった。これは三上常斐にとつては好ましい転任ではなかった。このように、朝廷の意図は正確な官位一致を目指していたわけではなく、六位と五位に合わせて、その後は官の上下幅を拡大したことであった。次の史料により、この調整が地下官人全体に及んでいることがわかる。

史料三¹⁸⁾ 『職事方御剪紙留』 文化四年（一八〇七）二月二日

今出川家侍伊賀守藤原清周

遷大和介

三条家侍

壱岐守平正高

遷相模介

文殿

石見守宗岡行和

遷近江介右兵衛大尉如旧

近衛家侍

日向守藤原元陳

遷出羽介

文化四年二月十三日 宣

下北面石見守賀茂直顯

遷大和介

内舍

石見守大江貞孝

遷尾張介

府隨身

信濃守源供資

遷陸奥介右将監如旧

この史料のとおり、文化四年（一八一二）初めに公家家来や地下

官人から国守の官が奪われ、代わりに国の介が与えられた。水口清堅は明和五年（一七六八）に能登介から隼人佑に転任、村雲（二）近信は明和六年に主計権助を兼ねた。土山（二）武貞は隼人佑（寛政八年）と主膳正（文化六年）を兼ねて、文政二年駿河守に転じた。土山（三）武業は天保三年（一八三二）に隼人佑となった。そのあとは明確な方針転換が見えなくて、朝廷は前期より官を慎重に与える傾向が伺える。

明和五年（一七六八）には御隨身官人四十二人のうち十八人が近衛官のほかにもう一つ別の官をもっていたが、天保十四年（一八四三）には近衛府官人の増加にも拘わらず、兼官の官人の数は七人に縮小しており、朝廷の官に対する厳しい態度が伺える。

史料一に書かれているとおり、御隨身（近衛府）官人は院の四方拝や即位、御幸、大将と中将の隨身をした。仕事の量は決して多くはなかった⁽¹⁹⁾。勤めの例の一つとして、安政の新御所への遷幸行列に参加する近衛府官人の部分をつぎに挙げる。

史料四⁽²⁰⁾「御遷幸行列記」

右近衛府	右近衛代	上田右近衛府生	雑色笠
(前略)	笠		

左近衛府	左近衛代	水口左近衛将曹	雑色笠
------	------	---------	-----

渡辺右近衛将曹	雑色笠	土山右近衛将監	雑色
			(後略)

水口左近衛将曹	雑色笠	調子左近衛将監	雑色
			(後略)

ここは近衛代の本隊の前部で、そのあと殿上人の少将六人、公卿の中將の六人と左近衛大将一条大納言と右近衛大将廣幡大納言が続いた。地下官人であった近衛府官人に雑色二人と笠が付いていたので、近衛府の殿上人と公卿にそれよりの付き人がついていた。とりあえず末端の地下官人にとって堂々たる出演であった。この近衛代の前に内大臣、右大臣、左大臣が参列して、各大臣の前に番長二人が並んでいたが、残念ながらその名前は挙げられておらず、右大臣、左大臣を前駆した番長のところには「身人部」としか書いていない。身人部氏であった水口家の内、番長四人がいなかったので、家来等が番長を勤めたのであろう。

天保五年（一八三四）の近衛府の上官は左近衛府大将内大臣近衛忠熙と右近衛府大将権大納言鷹司輔熙左近衛中将年預今城定章、右近衛中将年預藏人頭油小路隆道、左近衛府庁頭陣官人富島元章、右近衛府庁頭出納平田職修、左近衛府年預檢非違使堀川弘義、右近衛府年預将曹土山武宗であった。これ以外に、左近衛中将庭田重基、徳大寺正三位公純、大炊御門正三位家信、右近衛中将橋本参議実久、難波從三位宗弘がいた。さらに若い平公家たちが少將の官を持っていた⁽²¹⁾。

知行から考えて、本来頭であった土山家と調子家のうち、土山家はそのような二名の指名を受けたが、調子家の名はみあたらない。京都から離れた調子村で暮らしていた調子家は、触頭や口向け役人として積極的に朝廷で働くことはなかったのであろう。そのため土山家が、左右近衛府とは関係なく、全体の触頭となった。但し、触頭とはいえ、その長ではなかった。近衛府官人は独自に武家伝奏に

連絡していた⁽²²⁾。

史料五⁽²³⁾『廣橋兼胤公武御用日記』宝暦九年十二月十五日

一、殿下被仰、土山淡路守御隨身伸ケ間触催、願之通可触催可
申付被令、願書返給了

土山淡路守武真は当時三八年間の長い官人経歴を持ったが、自分の役割に不安を感じて願書を出したところ、関白⁽²⁴⁾から今までどおりの役割が認められた。

『地下家伝』には近衛府に関する重要な決まりが明記されている⁽²⁵⁾。朝廷が近衛府を無計画ではなく、計画的に増員させたのであれば、増員した時期と変化のない時期が見えてくるはずである。初期には府生家を意図的に増やした痕跡は見られなかった。

①府生立家(二十八家) 調子三家並びに富家 三上の三家 水口の六家 村雲二家 土山の源氏二家 秦氏の二家 鈴木二家(十九家) 鳥山 三沢 渡辺 山中 山本 三宅二家

②天保五年(一八三四)四月七日より御隨身から近衛府への改称

③同日左近衛府府生と番長十二人、右近衛府と同じ人数となる

④番長を二十年勤めた場合、叙位される。

⑤子孫は必ず番長から勤務を始める。

⑥同月二十三日、補任されている人々の子孫のうち十五歳以上の者に官職が与えられる。

⑦父子両人が府生として勤めることはできない、必ず番長を経て、

補任される。

『京都御役所向大概覚書』⁽²⁶⁾には諸役を免除された御隨身官人としては二人しか載っていない。土山出雲守と水口飛騨守である。諸役の対象は家持の人、いわば裕福な者たちだけであつたので、他の御隨身官人らは裕福ではなかったと推定できる。調子家は京都から離れて自分の領地に住んでいた⁽²⁷⁾ので、ここには載っていない。

御隨身の官人は隨身としてだけでは生計をたてることができなくて、以前から禁裏や仙洞の口向役人として勤めていた。例えば、文久二年(一八六二)の『雲上明覧』⁽²⁸⁾には、口向役人の頭であつた執次衆の中に「土山淡路守 百万遍屋敷」「渡辺下総守 新烏丸切通シ」「鳥山右近将曹 室町上立売下ル」がいて、御勘使兼御買物方に「鈴木右近将曹 等持院村」、御膳番に「水口左近将監 百万遍屋敷」、御鍵番に「鈴木左近将監」と載っている。

享保十一年(一七二六)には御隨身のうち九人が口向役人として勤めている。さらに、宝暦九年(一七五九)には七人、安永十年(一七八二)には十三人、明和五年(一七六八)には十一人、文政十三年(一八三〇)には十一人、嘉永五年(一八五二)には七人、文久三年(一八六三)年には六人同様の例が見られる。御隨身・近衛府の官人が増えても、近衛府出身の口向役人は増えなかった。調子(二)家と富氏は院の下北面、女院の北面に勤めた。三つの土山家と三澤家、渡辺家、鳥山家、山本家は取次を務め、村雲家と鈴木家、水口家は御膳番に勤めることが多かった。江戸時代後半になると格下の御鍵番や御奏者番に入る近衛府官人もいた。それは番長家の人だけでは

なかった。住居に関する特徴も観察できる。触頭土山家は元禄十三年（一七〇〇）あたりから幕末まで（元）百万遍屋敷に住んでおり、他の御隨身家（三澤、水口、村雲）もそこに住んでいた。他の地下官人もこの百万遍屋敷に住んでいたことから、朝廷の地下役人らは長屋に住んでいたと想像できる。一方、他の近衛府官人らは京都から少し離れた北岩倉、調子村、等持院村、御室村に住んでいた。その関係で『京都御役所向大概覚書』には土山（三）家と水口（一）家だけが町屋の諸役の免除を受けたことが記されている。

徳大寺家の武家伝奏の記録の中に『宿所届』²⁹が含まれている。この史料からは四年に亘る朝廷社会の住所等の変化が分かる。公家は拝領した屋敷に住んでいたのも、隠居別居以外にあまり載っていないが、届の多くは公家家の家来、地下官人、医道の弟子によって出されたものである。記録の中には近衛府官人から二十通の届もある。たとえば水口右近番長は御車道今出川下で実父築沢と同居していたが、後に四辻家の長屋に引っ越した。水口右近将曹は油小路竹屋町下借家から桜井家の長屋に入った。公家家の長屋に入るのとはほとんどその家の家臣・使用人であった。

よく見られる住形態に「同居」がある³⁰。家督を継いでいない人の場合、「部屋住」と書かれている。例えば、水口左近府生は父親である主殿寮史生今藤のところに、山中左近番長は父親である小田左膳のところに、三上左近府生は町人の三上屋のところに「部屋住」していた。また河合右近番長は今出川小川西で醍醐家来河合伊勢介と同居し、香山左近番長は仁和寺御内香山右京と同居していた。この場合には親族と同居していた。苗字が違う親族との同居の場合

もある。例えば進藤右近府生は水口左近将曹のところに同居していたが、進藤家は一代前に水口家の分家として取り立てられた家である。もちろん親族同士とは限らない。同居もしくは部屋住と書かれている場合、借家で同居しているのか、持ち家で同居しているのかは分からない。唯一、山中左近尉は自宅で暮らしていたが、この記録にある四年間の間に同居暮らしに変わった。

松田氏は医者である近衛府官人の事例を報告している。そのほか明治初期の「士族短冊名簿」³¹に記載した資料からは、近衛府官人が公家、寺、武家の家来であったことが視える（東坊城の雑掌、清閑寺家、桜井家、高辻家家来、菊亭（今出川家）用人、東九条村郷士、聖護院奏者番、高倉家近習、小浜藩家中）。

ほかの隨身官人は公家家の侍や医師として勤めた。御隨身官人としての官位は、本来無位無官の口向役人と公家侍のために低所労で官位を与える道であった。

史料『左右近衛番長家伝記御再興並新補願番長依勤労初官位之次第』

新しい史料として『左右近衛番長家伝記御再興並新補願番長依勤労初官位之次第』、略して「番長家伝記」と呼ばれる記録を紹介する。筆者が京都の古書店で発見した古文書の一冊である。記録者は水口左近衛府将曹兼伊勢介身人部清俊であった。清俊は寛永二十年に設立された水口（五）家十一代目の当主であった。彼は文政八年（一八二五）生まれ、当時二十七歳であった。この三年前に伊勢介に任命されている。この年の十二月、従六位上に叙される。慶応二年

(一八六六) 四月五月伊勢守に任命される。百二十三丁(前部の番長家伝八十四丁、後部三十九丁)の記録(二三・二cm×一七cm)である。彼は嘉永五年(一八五二)五月に他の記録を写し、そのあと慶応元年(一八六五)十二月まで記録を書き続けた。この一冊は二つの部分から構成されている。前半に各番長家の歴代の勤めが記録されている。『地下家伝』より長く、幕末まで続いている。後半は文政九年(一八二六)以降の番長への推薦、天保五年(一八三四)の任命の動き、その後の番長に関する動きを記載したものである。この部分は水口清政の記録からの写しである。後半は本家十五代目当主身人部清政の記録(触や書類の写し)の写しであり、これは水口家の本家と分家の親族同士の交流の証拠である。この史料の情報は『地下家伝』と一致しているが、より詳しく、情報は慶応元年(一八六五)十二月十九日、中川意信の番長任命まで更新されている。

まず、第一部のデータをまとめる。二十八の番長家が存在した。『地下家伝』では二十二家となっている。番長家を取り立てられた時期をまとめるとつぎのようになる。

寛政六年(一七九四)から中川家と進藤家、寛政八年(一七九六)から水口(七)家と山本家を取り立てられた。享和元年(一八〇一)に山本義雄が解官され、山本番長家となった折、河北家と鳥山家、藤木家を取り立てられた。山本の解官と河北の補任の約半月後に水口家(八)が設立された。次の番長家設立の時期は文化六年(一八〇九)三月十三日であり、松宮家、入谷(一)家、入谷(二)家、西尾家、三澤(二)家、上田家(一)(同月十五日)は番長の列

に加わった。文政九年(一八二六)十二月二十六日に田中家、水口(九)家、上田家(三)が設立された。

天保五年(一八三四)四月二十五日に土山(五)家、橋本家、伊佐家、山中(二)家、川合家、天保六年(一八三五)に松田家、天保七(一八三六)年に水口(十)家が設立され、天保八年(一八三七)に山中(三)家は山中(二)家の補欠となった。天保十一年(一八四〇)に進藤(二)家、西尾家の補欠のため弘化二年(一八四五)正月に三宅家、弘化三年(一八四六)十二月に香山家を取り立てられた。

幕末まで断絶した番長家は山本家(享和元年、解官)、鳥山家(文化十一年、相続人無)、西尾家(弘化元年、改典葉寮医師)、水口(九)家(天保五年、本家相続)、山中家(二)(天保五年、本家相続)、水口(十)家(時期と理由不明)である。

番長家の親戚背景をみると時に二重、三重の構成となっている。

- ・府生家の庶子が作った番長家は水口(四)家から水口(七)家と水口(八)家、山本府生家から山本番長家と松宮家、水口(六)家から入谷(一)家、田中家は水口家、三宅府生家から三宅番長家であった。

- ・府生家の二男に見立てた養子により設立した番長家は、水口(六)家から入谷(二)家(実は姪)、土山家から西尾家(実は従父弟、実は医師二男)、中川家から上田家(実は林丘寺家来の次男)であった。

- ・表向きに府生家と養子関係を持った家は二つであった。三宅(二)家から中川家、土山(四)家から土山番長家(実は瀧口

坪田五男)。

・府生家と遠い親戚であった家は九つの家であった。河北(水口(四)の孫)、藤木(三上(三)の孫)、伊佐(水口外孫)、鳥山(鳥山の曾孫、実は醍醐家侍次男)、水口(水口八代孫)、山中(山中姪)、三澤(三澤の同家検非違使の玄孫)、橋本(三澤姪男、実は口向役人橋本貢倅) 松田(鈴木婿弟)

・番長家から設立された家は河合(鳥山外甥、実は醍醐家侍四男) 上田(入谷、実は高倉家家来、進藤(二)家(進藤の本家、従父兄)、香山(土山の従父兄、実は仁和寺宮侍の倅)。

番長を勤めた者は七十二人いた。補任した年齢は様々であり、最高齢の四十六歳から最低齢の十二歳まで幅があった。しかし取り立ての時期(初代目)を外せば十五歳(十九人)が、一番多く、十六歳(七人)、二十年代(十八人)であった。

初代の出身を前に述べたが、後の代に内舎人の次男、聖護院宮侍の四男、城州内里村医師小佐治、梶井宮侍の男、修験者で医者の入谷肇の次男、左官掌小野の次男、姉小路家家来の次男(四辻家の家来となる)の者は番長となった。

番長は無位の役であるが、七十二人の番長のうち、十四人だけは叙位された。その理由は後で見えるように、天保五年(一八三四)までは番長が叙位される制度が設けられていなかったことにある。また幕末に近づくに番長家は増えたが、叙位されるほど長く勤めることもできなかった。番長が得た最高位は正六位下であった。天保五年の前に長らく務めた番長が従六位下をもらって、同時に府生に補任された。それ以後、二十三年間―二十五年間勤めた後叙位された。

そのあと、七年間勤めた場合には従六位上に叙位された(七人)。正六位下まで辿り着いたのは三人である。藤木常敬は左近衛将曹に任命された。その反対に一人が番長の役を辞めた。理由はいくつかある。既に述べたように本家の相続のほかは安政三年(一八五六)に辞めた人もおり、安政の大獄に関った者も二人もいた。

中川意看・春看親子で同時に番長を勤めた。進藤貞則は文政八年(一八二五)に亡くなったが、跡継ぎが一五歳になってから文政十一年(一八二八)に継いだ。水口家の場合、清体が一八歳で亡くなった後、その父の次男として清広が養子として入るまで六年間が過ぎた。松宮家の場合は尚澄と義信の間二十一年が空いていた。水口清広と息子は同時に番長を勤めて、父が天保十三年(一八四二)に叙位された。河北房直は安政三年四月七日に叙位され、息子の房義は約一か月後五月一日に二十歳で番長に補任された。通常、十五歳で番長になれるので、その遅さの理由には金銭か跡継ぎ選びかの訳があったのであろう。水口義秀が天保五年(一八三四)四月二十九日に補任され、その四日前に跡継(息子実孫実養子)が十六歳で番長に補任された。この跡継ぎが辞官した十二日後跡継(息子実兄実養子)が補任された。

以下、「番長家伝記」の後半部だけを十一の項目に分けて翻刻にして、紹介する。

史料六 「番長家伝記」

文政九丙戌年十二月廿日

今度、番長可被新補二付人体相調可申上旨、大将殿御命候

在テ御恐ニ候間、明廿一日中右書付武貞江向ハ、被申出候、尤人体無之候ハ、其段も書付御申出可 被成候、仍申入候也

土山駿河守

十二月廿日

武貞

右者二度目新番長御再興被補候節、被 仰出候触書写

御内御使番伊佐内記男

伊佐拾三郎源裕清^ヒ

二十一歳

高祖父

水口故石見守

滋野井殿家来伊佐故越中

養子実水口故石見守次男

曾祖父

伊佐故丹後

祖父

伊佐故主馬

祖母

加藤故牧右衛門女死

父

伊佐内記

後桜町院様御代御賄改

母

河合故理右衛門養女

実水口故大和介女

右之者、此度番長御取調ニ付被 召出度奉願上候、何卒宜

奉願候以上

水口右近将監

戌十二月二十一日

清好

土山駿河守殿

右之通、書附を以願出候処、余り遠縁有之、且は人数相定候間、重テ可願出旨ニテ不被補候事

文政九戌年十二月廿六日被新補候人体四人左之通

水口左近衛将監身人部清郁次男

田中左近衛番長平盛桜 十六歳

入谷左近衛番長源清宣養子

上田左近衛番長源宣衛 十二歳

三沢故右近衛番長源為利男

三沢右近衛番長源為俊 二十一歳

水口右近衛府生身人部宣清男

水口右近衛番長身人部清貫 十三歳

一新補番長

享和二年

文政九年

天保五年

従 御再興三度目也

水口清好は禁裏口向役人の息子を推薦するが、遠縁の親戚であるため、断られた。近衛府の家柄は新任の番長のため重要な条件である。水口家本家七代目当主石見守清直の二男が養子として伊佐家（滋野井家の家来）に入ったそうである。出願者は本家十二代目清好である。伊佐の場合に四代前の祖先は遠過ぎると言われている。四つのポストにはもっと有力な候補者がいたために拒否されたのであ

る。地下官人についての研究の多くには希望者はすぐ官人になれると書かれているが、この場合、上司からの拒絶が見られる。多くの場合には仲間と上司への根回しがあつて、この様な拒絶は少なかつたかもしれない。しかし言い換えれば、それより早い段階で希望を諦めたケースもよくあつたであろう。番長の十二歳の養子が任命されていることから、実力よりほかの選別基準が存在したことが分かる。実は誰の息子であるかの書かれていないが、書かれていないからこそ、それは近衛府任命に有利な情報ではなかつたのであると想定できる。当時、水口家から二つの分家を取り立てているにも関わらず、本家筋の水口清好が伊佐以外の候補者に関心を示していないのも意味深である。

番長を立てるは偶発的ではなく、ある時期に意図的に新任を募つたのである。

史料七 「番長家伝記」

天保五年四月六日

両大將殿被 仰渡左之通触書、己後左右近衛府生番長各以十二人員数被定候事、左右近衛府生番長各以十二人員数、番長之輩己後以廿余年勵勤之勞可有判授、子孫必經歷番長不可有、直補事別紙之通両大將殿被仰渡候仍テ申入候、以上

四月六日 土山右近將曹武宗

仲間中宛

天保五年

此度府隨身被止称号、自今近衛府ト被称候、院御隨身為別事、右之通被 仰出候段、両大將殿唯今被仰渡候、仍テ此段申入候、以上

四月九日

武宗

仲間中宛

天保五年

以後、當時有補輩新補之輩之子孫十五歳以上判授之事、旧家新家之輩父子補府生事停止、必經歷番長以勞判授之事、右之通鷹司右大將殿被仰渡候段、午四月廿四日武宗分触書来候也

天保五年四月廿五日左之通両大將殿ヨリ被仰渡、安二他国仕間敷候事、万一無拠儀ニ候者両大將殿江御届可申入候事、右之通土山武宗方ニテ被申渡、依之番長中江申入候事

ここに挙げられているのは、名称変更のこと、左近衛番長十二人、右近衛番長十二人、京都から留守の時に大將に届けることであるが、これは言い換えると、両大將の近衛府地下官人を管理したいという意図である。右近衛府生・番長は十二人と左近衛府生・番長は定められた。番長は十五歳以上の者に対して任命する。しかしその後十三歳の子供が番長に任命されたこともある。松田氏の論文に拠ると、左近衛大將が近衛府を支配しているようにみえるが、よく宛先として両大將になって、右近衛大將の独自の命令もあり、右近衛府の任命は右近衛大將が行っていた。しかしいうまでもなく上位に

立っていたのは左近衛大将であった。

史料八 「番長家伝記」⁽³²⁾

天保五年四月

府隨身 院御隨身番長等之弟子并庶流及親族ニテモ可然人体番
長ニ可被新補輩相調名前可差出候旨、両大将殿被仰渡候、間
早々御調来り、十五日迄ニ書附武宗江被申聞可被成候、以上

四月六日

武宗

仲間中宛

右ニ付、四月十四日中奉書半切ニ認、左之通、書附土山武
宗江差出之候

水口故大和介孫

御内御使番

伊佐大進源裕清

二十九歳

実方

一、父 御内御使番

伊佐内記

一、母 後桜町院様

河合故理右衛門養女

御賄改

実水口故大和介女

一、弟 御内御使番

中川宮内

一、従母弟

水口左近府生

午四月

水口右近将監

右之通、武宗江差出候、名代小佐治石見守被致■候、翌十五
日伊左内記方江申来り候ニ、其去戌十二月願出候書付遠縁ニ有

之候間、此度近キ親族之断書可差出旨申来候ニ付、左之通書付
差出候

伊佐拾三郎事

伊佐大進裕清

右戌十二月度、親類故遠キ高祖父水口故石見守儀相認候得共、
此度乍縁類近キ外祖父水口故大和介ニ相改肩書ニ相認申候、此
度御断申上候、以上

午四月

水口右近将監

午四月廿四日左之通回文来り

土山敦五郎

橋本次三郎

伊佐大進

山中左門

右之輩此度被補番長候、御内意左大将殿被仰渡候、仍テ為

御心得申入候以上

四月廿四日

土山左近将曹

土山武行殿

三沢為祥殿

水口清好殿

山本芳全殿

一、同日左之通土山武宗分回文来り

中川番長春看

右昨春以来内々他国随意之進退、甚不埒之至、且御用御差支之程モ恐當候間、左番長被 召放候事、右近衛左大將殿武宗江被仰渡候事

一、午四月二十五日左之通土山武宗今申来ル

土山敦五郎

松本治三郎

伊佐大進

山本左門

中川和四郎

御用之儀有之候間、今日午刻同道自宅江御入来可有候、仍テ申入候也

四月廿五日 土山右近將曹

土山武行殿

三沢為祥殿

水口清好殿

山本芳全殿

中川意看殿

右之通、同供土山武宗宅江參入、夫より武宗并父小佐治石見守為誘行、近衛左大將江參上、諸太夫北小路大炊頭を以、各番長御判授候事

右二付昼刻御礼回勤手札左之通

今般

左近衛番長新二

被補冥加相叶

難有奉存候左御礼

伊佐左近番長

源裕清

二十九歳

四御所 御撰家方 儀奏方伝奏方 職事方等不残土山江茂參入

一、一条殿江御館入御願御礼參上、■跡今日限可被仰、出旨被申渡執次諸太夫難波伊予守也、右之通、夫之四月廿五日御礼回勤無滞相済候事

天保五年四月廿五日於

左大將殿被補左近衛番長

瀧口坪田故左衛門尉源勝清五男 十八年

土山右近衛將曹秦武行養子

土山左近衛番長秦武利 二十四歳

三沢右近衛將曹源為祥姪男

橋本左近衛番長源政一 二十九歳

水口故大和介身人部清重外孫

伊佐左近衛番長源裕清 四十六歳

山本故左近衛將監大江重全姪

山本左近衛番長大江泰全 十五歳

中川左近衛番長源意看実子

中川左近衛番長源意直

右同日於

右大将被補右近衛番長

西尾右近衛番長源元衛養男 二十六歳

西尾右近衛番長源鎌道

水口右近衛番長身人部義秀男 十六歳

水口右近衛番長身人部義和

水口右近衛番長身人部清広男 十三歳

水口右近衛番長身人部清譽

松宮故主水養子 三十八歳

松宮右近衛番長源義信

鳥山故右近衛番長源雅言外甥 十七歳

河合右近衛番長平雅員

文政年間に伊佐裕清の斡旋が失敗したので、今回は水口家の外孫であるように書き換えた。書き換えた理由は以前の願書が拒絶されたためと説明されている。本当に外祖父であつたら、なぜ文政の頃に書かれていなかったのか説明されていない。説明がなくても、この時の候補者はそのまま認められた。任命権は大将にあつても、お礼回り、もちろん報告を兼ねて、御所や伝奏等に出向いた。土山が触頭として手続きを仕切っていた。土山の触書の宛先である「仲間」とは誰を含んでいたのだろう。番長家の子孫が手を挙げたので近衛府のすべてであつたと想像できるが、その後は斡旋した本家筋の府生家だけだったので、「仲間」がより狭い意味で使われていたかどうか定かではない。西村氏が年番生の仲間また仲間の長に束ねた地下

官人仲間を紹介した³³。この近衛府は触頭がいても、各近衛府官人が独自に伝奏などに連絡が取れた。

史料九 「番長家伝記」

一、天保五年四月廿九日、是迄番長之処、以励勤之勞、此度新二從六位下被補府生候人体左之通

中川左近衛府生源意看 五十六歳

水口右近衛府生人身部義秀 七十八歳

藤木左近衛府生秦常吉 六十歳

入谷左近衛府生源清宣 四十歳

入谷右近衛府生源長剩 四十歳

進藤右近衛府生源定保 三十五歳

右之外二上田左近衛番長藤原直品願出候得共、院伺不申心得違之由程、左大将殿小折紙被差留候故、追而相願可申旨之由、則同年六月十一日叙從六位下 上田左近衛府生藤原直品 六十歳

番長の上進のルールが公開され、番長の初叙位がおこなわれた。これは初めての番長叙位であつた。一期に数人を叙位する。中川意看は四十年間番長を勤めた。入谷家の二人と上田直品は二十五年間、藤木常吉と水口義秀は二十二年間、進藤定条は二十年間番長を勤めた。かなりの差がある。これは明らかに大きな差であるが、番長を再興した寛政六年に叙位・府生補任が考えられていなかったため、天保五年（一八三四）の改革で二十年以上勤めた者たちに叙位・

府生補任の道が開かれたのである。この制度の導入以後、叙位・府生補任が適宜行なわれるようになった。その後叙位の条件は勤続二十年以上と決められた。天保五年（一八三四）の叙位を見ると、二人が勤続二十三年、一人は二十四年、三人は二十五年で叙位されている。

史料十 「番長家伝記」

天保九年十一月三日

上包

近衛府

右近番長藤原義信

乍恐奉願口上覚

一、 義信、天保五年四月廿五日、被 補右近

番長、其後御用相勤冥加至極難有仕合奉存候、此上恐多奉存候得共、忤義豊十五歳ニ罷成候、何卒御憐愍を以、此者被 補番長候様奉願上候、格別之節を以、御聞濟被為成下候者、重々難有仕合奉存候、此段偏宜御沙汰奉願上候、以上

戌十一月 松宮右近番長

徳大寺

日野

勘例

右近番長

秦常敬 二十歳

文政六年正月十六日 被 補右近番長

右近番長

身人部清譽 十三歳

天保五年四月二十五日 被 補左近番長

右

天保九年十一月八日

被為左近番長

松宮義信番長補任の願書と小折紙である。息子が十五歳となったので、息子も番長の列に加わるように懇願する。

史料十一 「番長家伝記」

天保十三壬寅年三月二十日、同家清廣番長ハ初官位小折紙

左之通差出候

上包

近衛府

身人部清廣 四十六歳

申 従六位下

身人部

勘例

近衛府

源長利 四十歳

天保五年四月廿九日 叙従六位下

上包

近衛府

右近衛番長身人部清廣 四十六歳

申 右近衛府生

右近衛番長――

勘例

近衛府

源長剰

天保五年四月廿九日 補左近衛府生

近衛府

右近衛番長身人部清廣

文政二年十一月十九日 被補右番長

今年廿四ヶ年

近衛府

右近衛府生源長剰

文化六年三月十三日 被補右番長

天保五年四月廿九日 被補右府生

近衛府

左近衛府生源定保

文化十一年十月朔日 被補右番長

天保五年四月廿九日 被補右府生

右

天保十三年四月十四日

宣下之事

水口清広番長の小折紙、記録者水口清政から見ると同族「同家清広」と書かれている。清広が二十四年間番長であったので、叙位されるように頼む。二十年間番長に在籍しても必ずしもすぐに昇格されるわけではなく、さらに都合のいい時点を待たなければならぬ。

史料十二 「番長家伝記」

天保十四卯年十二月十二日、水口左番長賢孝

養子願二付願書親類書左之通

奉願口上覚

一、私久々病氣罷在候処、未相統之男子無御座候ニ付、今度親類共之内姉小路殿御家来築沢検司三男勝次郎与申者、當卯十四歳相成候此者養子相統之儀奉願候、以御憐愍之御沙汰願之通被仰付被下候ハ難有仕合奉存候、仍別紙親類書相添御願申上候間、宜御沙汰奉願候、以上

卯十二月 近衛府

水口卯番長身人部賢孝印

徳大寺大納言様御内

物加波周防守殿

滋賀右馬大允殿

日野前大納言様御内

河野丹波介殿

山本右近将曹殿

親類書

姉小路殿家来

一、父 築沢検司

金座後藤年寄

一、母 井口故忠左衛門娘

石州浜田家中

一、祖父 可児預左衛門死

同家中

一、祖母 井頭行左衛門娘死

一、兄 築沢由太郎

一、同 壱人

一、弟 壱人

石州浜田家中

一、叔父 可児弟右衛門死

同家中

一、姑 根本重左衛門妻

同国三宮大明神々主

一、同 岡本大隅守妻

母方

一、祖父 井口忠左衛門死

三室御所御内

一、祖母 本多故隼人娘

当侍在江戸

一、旧男 井口隼太

四辻殿老女

一、娣 藤浦

賀茂社中

一、同 藤木伯耆守妻

一、娣子 壱人藤木伯耆守女

右之外近親類無御座候以上 卯十四歳

卯十二月 築沢勝次郎印

一、右左番長賢孝公養子願之願書、自分可差出し処所勞引筆中

二付、代水口左近将曹清生取扱、其刻右願書、并親類書等官物、

一条殿江相伺、夫々両大將殿江相伺夫々伝奏衆月番江差出之

事、但し非番方伝奏衆江も口上ニハ養子願書御月番江差出、断

間為宜奉願之旨、申上候也

手札左之通認候

水口右近番長

代 水口左近将曹

一、同十四日、伝奏月番徳大寺殿より被招参殿候処、養子願之

通被 仰付候段、被仰渡依之御札申上之候、手札認方左之通

但右番長賢孝所勞勝次郎も 所勞ニテ候処兩人代と有之

今般養子
願之通被
仰付難有仕合
奉存候右御礼
奉申上候

水口左近番長
同 勝次郎
代 水口左近將曹

右之通、手札を以箇前左之通関白殿 一条殿 両大将殿両伝奏
衆 土山 同家中等江夫之廻勤之事

一、同月十九日、右番長辞官之願、并男勝次郎清賢被補番長候
願書ヲ以、伝奏月番江差出ス、但口上左之通手札
左之通、非番方へも申入事

水口右近番長
代 水口左近將曹

水口右近番長辞官、并男勝次郎被補番長候、願書本人所旁二付、
代を以、奉願候段申之候事

同年同月十九日、水口右番長堅孝辞官之願、男勝次郎被補番長
候様、願書左之通

奉願口上覚

一、 私儀永々病氣ニ而引籠、 御陰を以保養仕難有
仕合奉存候、此怠多御願奉存候得共、 御用向之節勤仕之儀無
覚束候間、辞官御願申上、男勝次郎清賢、當卯十四歳ニ相成候

者、何卒御憐愍を以、被補番長被下置候様、奉願上候、厚営を
以御聞濟被為成下候者、重々難有仕合奉存候、此段宜御沙汰偏
奉願上候、以上

近衛府水口右近番長印

卯十二月

賢孝

徳大寺

物加波

滋賀

日野

河野

山本

一、同月廿五日清賢於 右大将殿右近衛番長被補候二付御礼回
勤箇所手札等左之通

今般被補右近番長
難有仕合奉存候右 水口右近番長
御礼奉申上候 清賢

御所 ■ 関白殿 一条殿 御撰家方 儀奏方 伝奏方 職事
方 土山 同家中等江回勤之事

一、右近番長辞官十二月廿三日被閣下候事

水口賢孝番長は養子・辞官の願いを完全に水口（四）家第九代目

当主清生に託した。この水口番長家は水口（五）家の末家であったので、同族同士の助け合いとも言える。願書は大將に宛てたものではなく、直接に番長から武家伝奏に宛てられた。跡継ぎ養子は公家の家来の息子であり、多くの親族は浜田藩藩士である。地下官人や公家侍らの広いネットワークの一例である。一条家の家札であるので、代理人が一条家と土山家に結果報告を兼ねて、礼に回ったほか、「同家中」いわば水口家同族にも回った。しかし「所労」のため、新構成員との顔合わせは行われなかった。

史料十三 「番長家伝記」

一、西尾右番長典藥寮改補西尾安房介と申上候、職事等分武伝江被差出候剪紙之写左之通

弘化元年十二月廿二日 宣

近衛府右番長源謙道

改補典藥寮医師

西尾は医師家の出身で、典藥寮に転籍した。職事から伝奏への連絡だけで、その準備に誰が関わったかはみられない。

史料十四 「番長家伝記」

弘化三年丙午年十二月十三日、藤木常敬番長二而初官位小折紙

上包 近衛府 四十四歳

秦常敬

申 従六位下

秦——

家例

秦常吉 六十歳

天保五年四月二十九日 叙従六位下

勘例

身人部清廣 四十六歳

天保十三年四月十四日 叙従六位下

上包 近衛府

右近衛番長秦常敬 四十四歳

申 左近衛府生

右近衛——

家例

秦常吉 六十歳

天保五年四月二十九日 補左近衛府生

勘例

身人部清廣 四十六歳

天保十三年四月十四日 補右近衛府生

右 弘化三年十二月十七日 宣下之事

藤木常敬は二十四年間、番長であった。天保五年（一八三四）四月六日の大將触（史料七）には番長の勤務年数に関して「廿余年」と書いてあるが、実際はほぼ二十四年間で定着していた。

史料十五 「番長家伝記」

弘化四丁未年正月十六日伊佐左近番長男三四郎十五歳ニ相成番長被補候様願書左之通

乍恐奉願口上覚

一、私儀病氣ニ而引籠、御陰を以保養仕難

有仕合奉存候、此上恐多御願ニ奉存候得共、忤三四郎清綱当未二十五歳ニ相成候者、何卒御憐愍を以、被補 番長被下置候様、奉願上候、厚 思食を以 御聞濟被為成候者、重々難有仕合可奉存候、此段御沙汰奉願上候、以上

近衛府

未正月

伊佐左近番長印

左大將様

諸大夫御中

乍恐奉願口上覚

一、私儀病氣ニ而引籠、御陰を以保養仕難

有仕合奉存候、此上恐多御願ニ奉存候得共、忤三四郎清綱当未二十五歳ニ相成候者、何卒御憐愍を以、被補 番長被下置候様、奉願上候、厚 思食を以 御聞濟被為成候者、重々難有仕合可奉存候、此段御沙汰奉願上候、以上

近衛府

未正月

伊佐左近番長印

右大將様

諸大夫御中

右両通伝奏月番江入御内見候処、殿下之御内覧相濟、何之存寄無之候由ニ而、翌日右両通御返却ニ相成候事

一、右之通、夫ニ相濟、於 鷹司左大將殿被補左近衛番長候、右ニ付、左大將殿今武伝江被附候、御剪紙写之置也

近衛府

伊佐 左近衛番長源裕清男

源清綱^{キヨツナ} 十五歳

為左近衛番長

左大將と右大將への二通がまず伝奏に出され、それから関白がこれを読み、伝奏を通じて伊佐に戻される。その後伊佐から両大將に出されたのであろう。鷹司左大將が息子清綱を左番長に補任する。父の裕清の辞官の記録がないが、「番長家伝記」には裕清の死が記入されている。資料十に見るかぎり、十五歳の息子の番長補任は普通であるので、この願書で養子を願うほどに病気を強調しているから、他の場合のように仮病ではないであろう。伊佐が養子願の文章を雛形として使ったことも明確である。

史料十六 「番長家伝記」

弘化四年正月廿一日

一、嘉永元戊申年七月五日坊城殿未勤城州内里村医師小佐治柳トと申仁、丹波国住居之水口右近番長身人部義和名跡相続相願候ニ付、花山院殿附属故、村雲右近將曹謹信親族之儀ニ付、万事取扱候事右ニ付、諸願書等左之通

奉願上口上覚

一、私儀天保五年四月廿四日被 補右番長、其後毎度御用相勤、冥加至極難有仕合奉存候、然ル處先頃分所 勞之處、段々相勝レ不申、全躰之程無覺束候間、辞官之儀 御 聞濟奉願上候、私未男子無御座、何卒恐多御座候得共、私兄水口要人と申者有之、幼年より田舎ニ罷在候處、當年四十三歳ニ相成、未タ何方江茂相續不仕候ニ付、此者を以私家父水口故右近衛府生身人部義秀男ト家名相續、被 補右番長被下候様、奉願上候、何卒格別之御憐愍を以、願之通 御聞濟被為成下候様、此段偏御沙汰可被下奉願上候、以上

近衛府

七月

水口右番長身人部義和印

三條大納言様

御雜掌中

坊城前大納言様

御雜掌中

勘例

近衛府

水口

右近衛番長身人部賢孝

天保十四年十二月廿三日、辞右近衛番長、依病氣願之通辞官被聞召

水口

前右近衛番長身人部賢孝男

水口勝次郎身人部清賢

同年十二月廿五日 補右近衛番長願之通被 仰付

一、右之通願書并勘例書等両大将殿 花山院殿 伝奏衆等差出之候也

一、嘉永元年七月十二日義和辞勘被 聞召候事

一、同年同月廿四日義寧被補右近衛館長候事

水口義和は村雲家から水口家に養子として入ったので、村雲家と村雲家が所属する花山院家も発言できる立場にあった。

終わりに代えて

御隨身(近衛府)の人数は江戸中期に大きく増えた。それに伴う近衛府はいくつかの段階で変更された。第一段階は江戸初期の地下官人組織の再構築の時期であった。土山家の知行拡大、調子武通が父や息子とは違って初官は府生であったこと(天正年間)、水口清定の左番長補任(寛永二十年)などがその揺れ動きを物語っている。寛永年間以降に状況が落ち着き、御隨身官人の初官は将曹、初位は従六位下となった。第二段階はそれに対して朝廷は府生、一段階下の官を再導入し、貞享元年から八〇年間をかけて、一般近衛府官人家の初官を府生に実施した。逆に、宝暦年間に調子の本家の立場

を土山家同格に一般府生家より上にした。第三段階として、安永年間に朝廷が府生家の取り立てを止めて、番長の官を再導入し、その官に縛りついている番長家を取り立てて、計画的、段階的に番長家を増やした。第四段階（文化四年から）では、朝廷が官と位を一致させ、結果として、近衛官以外の官を兼ねる官人が減った。第五段階では、御隨身から近衛府への名称変更で復古を図り、番長の上進の道を開いて、番長家をいまままでより自由に増やすことを許した。他の地下官人の研究では触れられていないが、朝廷には細かい形成意図があったと見られると結論づけたい。近衛府にはこのような特徴があるため、ひき続き様々な地下官人集団を調査し、比較検討することが必要である。

注

- (1) 下橋敬長著、羽倉敬尚注『幕末の官廷』平凡社、一九七九年。
- (2) 梅田康夫「地下官人考」『高柳真三先生頌寿記念論集 古記録の研究』有斐閣、一九八四年。
- (3) 梅田千尋「近世宮中行事と陰陽師大黒松太夫——朝廷周辺社会の構造転換——」『日本史研究』四八一、二〇〇二年。西村慎太郎「近世朝廷社会と地下官人」吉川弘文館、二〇〇八年。秋山晶則「御蔵小舎人真継家について」『論集きんせい』一三、一九九一年。須田肇「近世の内膳司について」『学習院大学史料館紀要』三、一九八五年。一つの集大成として西村慎太郎は地下官人組織の成立や官人としての町人、地下官人の収入など幅広く紹介している。『近世朝廷社会と地下官人』吉川弘文館、二〇〇八年。
- (4) 松田敬之「近世期の近衛府官人（御隨身）」『花園史学』二四、二〇〇三年。

- (5) 三上景文（著）、正宗敦夫編纂校訂『地下家伝』現代思潮社、一九七八年。
- (6) 社家でありながら地下官人でもあった加茂氏淳の宝永元年十一月（享保五年の写し）の記録である。『當今年中行事』京都大学文学部図書館所蔵。
- (7) 孤松子撰「京羽二重」、新修京都叢書刊行会『新修京都叢書第六巻』、一八一頁、光彩社、一九六八年。
- (8) 橘屋清安「京羽二重」早稲田大学付属図書館、古典籍総合データベース。
- (9) 「京羽二重」早稲田大学付属図書館、古典籍総合データベース。
- (10) 元禄二年（一六八九）、木坂玄蕃助（後に雅楽助または越中守）は口向の取次であった。「新撰公家要覧」、深井雅海、藤實久美子編『近世公家名鑑編年集成（一）』、二五七頁、終風舎、二〇〇九年。彼は徳川家の家来でありながら、御隨身でもあったと宝永五年（一七〇八）に書いている。「万世雲上明鑑」、深井雅海、藤實久美子編『近世公家名鑑編年集成（二）』七二頁、終風舎、二〇〇九年。
- (11) 「京羽二重大全」早稲田大学付属図書館、古典籍総合データベース。
- (12) 「京羽二重大全」早稲田大学付属図書館、古典籍総合データベース。
- (13) 京都大学附属図書館所蔵、平松文庫『諸届書并願書類留』第一巻享和元年（一八〇一）三月。
- (14) 「地下家伝」第一六巻、八三六頁。
- (15) 「地下家伝」第一五巻、七五九頁。
- (16) 西村、一七二—一七三頁。
- (17) 官位相当表、京都大学文学部国史研究室編『日本史辞典』、創元社版、昭和二十九年。
- (18) 京都大学附属図書館所蔵、平松文庫、『職事方御剪紙留』、文化四年（一八〇七）二月二日。
- (19) 出番が少ないと下行も少ない。賀茂祭に御隨身四人が参加して、合わせて八石の下行をもらった。『禁中年中行事略』新日吉神社文書、京都市歴史資料館写真版（整理番号日一六）、土山家と調子家以外

の近衛府官人が知行を持っていなかった。

- (20) 『御遷幸行列記』安政二年十一月二十三日、筆者所蔵。
- (21) 『地下家伝』一五巻、七五九頁、家名と本職は黒板勝美『公卿補任』吉川弘文館、一九七一年と『地下家伝』の格項目により付け加えた。
- (22) 例えば、弘化元年正月水口右近番長から徳大寺伝奏と日野伝奏宛ての宿所届がある。『徳大寺武家伝奏御用記録(宿所届)』東京大学史料編纂所所蔵。
- (23) 東京大学史料編纂所編『廣橋兼胤公武御用日記』第九巻、一六九頁、東京大学出版会、二〇〇九年。
- (24) 近衛内前は宝暦七年閏白に就任された。その前、一条兼香・道香親子が三十年間摂政・関白を勤めた。政策転換による土山武真の不安が起きたであろう。
- (25) 『地下家伝』第一五巻、七五九頁。
- (26) 岩生成一監修『京都御役所向大概覚書』清文堂出版一九八八年、一二一頁「一軒役 御隨身役 本満寺之図子町 土山出雲守」、一二三頁「一軒役 御隨身役 福島町 水口飛驒守」。
- (27) 井ヶ田良治「江戸時代における公家領の支配構造」『同志社法学』三〇巻一号。
- (28) 筆者所蔵。
- (29) 東京大学史料編纂所『徳大寺家文書』(整理番号四一七二―一七―三六)東京大学史料編纂所所蔵。
- (30) 一人が二つの役(町人と朝廷の役人)を果たす場合も二つの名前で「同居」するような届が出された。中村佳史「摂家の家司たち」、高埜利彦編『朝廷をとりまく人びと』、吉川弘文館、二〇〇七年。
- (31) 京都大学法学部図書館所蔵。
- (32) ■は判読不能の字を表す。
- (33) 西村、七五―八六頁。

Summary

Organization and growth of the escorting guard (mizuishin/konoefu) of the imperial court during the Edo period. In the Edo period court nobles and lower court officials served the emperor and the court. Many of the lower officials had to appear only very few times a year to fulfill their duties. The most families of court nobles were established during the first half of the 17th century. The organization for the lower official was also established at the begin of the Edo period. But the number of lower officials increased rapidly during the second half of the Edo period. In the research up to now, it was stressed, that the demand of commoners to enter this honourably service connected to some special merits was the main force behind the increase. In this report on one group of lower officials, the escorting guard (mizuishin/konoefu), the organization and the process of growth is inspected. Using also a newly discovered historical source, it is shown that the court actively enforced the increase and reorganized the grown group of escorting guard.